

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十八年三月一日発行（毎月一回一日発行）
第十二卷第十一号（通巻第一四三号）

鈴



山口誓子

山口誓子先生追悼号

第143号

俳句雑誌

GLOCKE

3. 2006

誕生日

品川 鈴子

湯気立てて小さくうなず頷く高島田

料峭りょうしやうの棲つまひるがへる舞子浜

小声撒き甘くて芳ばしき豆を

福豆に試す挿歯の噛み合はせ



粒毎に豆撒き猫をそそのかす

赤飯を雛と分かちて誕生日

独りごつ媪に雛の領きぬ

税申告済ませ媪の誕生日

山鴉とて恋鳴きの誕生日

ウエストへ廻る彼の手山笑ふ



玉 鈴

香川 三橋 早苗

炭跳ねて湯が沸くまでの割稽古
山猿もおしくら饅頭ボス真中
ごみ出しも湯上りも着てちゃんちゃんこ
粧ひし山懐に芝居小屋
着ぶくれの袖が誤操作 A T M

和歌山

宮原利代

仁王像喉の奥まで夕焼けて
譲られし席に体温冬来たる
敗蓮の敵か味方か矢を重ね
鴟猛る墓石尖りし兵の墓

茨城

三輪 慶子

対岸もここも冬ざれ水脈長し
手袋を嵌めて子供にかへりけり
冬紅葉置き忘れたる古財布
寒晴や風に乗りたる鳶の黙
有明の冬満月をみて発ちぬ

吟

愛媛 村上 和子

瓜坊も独り立ちして十二月
へりコプター低翔鴨の陣乱す
人垣の中に解体さる鮪
もう人を恐れてをらぬ枯蠓螂
忘年会替え歌が出て座が延びる

大阪

師岡 洋子

白壁に影ひとつづつ吊柿
空井戸の中へ続けり蔦紅葉
ロシア帽被りて兄が落葉焚く
お十夜の大釜洗ふ貴船川
冬満月路上ピエロの一輪車

兵庫

八木柙一郎

凍蝶のこゑか時折耳鳴りす
枇杷咲くや交り淡きひとのこと
枯菊に残れる色の暮れにけり
田仕舞の煙に紛れゆく背広
登り窯冬三日月は山の端に

東京 安田とし子

爐火燃えて上州訛あからさま
都鳥数へるたびに数うごき
蘆枯れて堤防しろく竣工す
わがために生くる残生冬薔薇
鳳凰の形に雲浮く年の暮

香川 合川月林子

水鳥に望遠カメラ据えて待つ
冬の川明治以来の石の橋
投網打つ場所狭まりし冬の川
古毛布兵舎の匂ひしてゐたり
冬ざれの杭打ちかけのまま暮るる

大阪 赤木 真理

湯豆腐や父の口ぐせ真似てみて
試し書くペンのらせんに冬の晴
おでん煮る目測り手測り勘どころ
言ひ訳をしては買ひ物十二月
年用意椅子の座面も貼り変へて

兵庫 秋田 直己

紅葉山コンビナートを下に見る
改築の見積り眺む懐手
風邪引きと先づは断はるアナウンサー
日向ぼこ寡婦の話題は宝くじ
防犯の役を引き受け年の暮

愛媛 足利 諄子

裏鬼門南天の実のたわわにて
破る子もなくてすすけし障子はる
障子はり替へて明るむ佛の間
日本丸帆を張る技や小春風
屈葬のごと膝を抱き日向ぼこ

愛媛 足利 徹

突風に冬帽奪はる地下出口
逃がしたる魚の話浜焚火
ひと筋の垂水となりぬ冬の滝
大北風に瀬戸大橋の無能なる
糶られぬし河豚ひたすらに泡ふきて

薬草歳時記

(一四二) レンゲソウ (蓮華草)

牛尾曜子

手に取^とるやはり野に置^お蓮華草

滝野 瓢水

この句は作者が、大阪の知人が遊女を身うけしようとしたので、おくれた句といわれている。(三熊花顛『続近世畸人伝』) 現代では、自然保護の立場から、山野草をやらに採らない戒めとして使われている。

中国原産、マメ科、レンゲ属の草で、その形がハスの花に似ているので「蓮華」となり、俳句ではなまつてゲンゲとか、ゲンゲンという場合が多い。漢名では紫雲英で昔の中国では、翹揺^{きょうよく}とか碎米齋^{さいまいしやう}といい、現代中国名は紫雲英です。渡来は十七世紀か、その少し前と推定され、「書言字考節用集」(元禄十一年)に、碎米齋とあり、貝原益軒の「大和本草」(宝永六年)に「京畿の小児コレヲレンゲバナト云」とあるのが最初の文献と思われる。

レンゲ草の結実に欠かせないのは、花を訪れる昆虫達です。ニホンミツバチ等のハナバチ類、モンシロチョウ等のチョウ類が代表です。ハナバチ類は花を操作して蜜を吸い、

花粉を集める際、餌と引き換えに受粉の仲立ちをします。一方、チョウ類は細い口物を花の隙間に差し込み蜜を吸うので、花粉は全く移動出来ず、レンゲ草にとっては有難くない昆虫です。マメ科植物の特徴として、根に根粒ができて、根粒菌が宿主から光合成産物をもらい、空中の窒素を取り入れて、余分なアンモニアを宿主に提供しています。レンゲ草を、田んぼに植え、田植前に鋤込むことで窒素肥料となる「緑肥」として、イネの生長を助けます。

薬用部分 全草(紅花菜)種子(紫雲英子)

成分 全草にトリコネリン、コリン、アデニン、たんぱく質、脂肪、アミノ酸、各種ビタミン、カナリン等、

薬効 全草に清熱、解毒の効能があり、咳嗽、のどの痛み、外傷、出血を治す。又種子ともに血を活かし、目を明らかにする効能があるとして、眼部疾患に用いられる。

使用法 三〜四月の開花期に、日干しにするか、新鮮なまま用いる。

乾燥した全草を一日量として、約5〜10g、水400〜600mlで½量に煎じて服用する。

生の葉をしぼり、その汁を塗布する。

参考文献 「牧野薬用大図鑑」 北隆社 / 「深緑の季節を歩く」 北隆館

「植物ことわざ事典」 東京堂出版 / 「生活こよみ」 講談社

著者略歴 神戸薬科大学卒

ゲンゲ (レンゲソウ) [ゲンゲ属] (まめ科)

Astragalus sinicus L. (中) 翹搖

紫雲英、蓮華草

種子 (橙黄色から黒)

花期：
3月~4月

蝶形花
紅紫色



須賀悦子画

薬用部分：

全草 (紅花菜 <コウカサイ>
種子 (紫雲英子 <シウンエイシ>)

E.S.

野道行けばげんくの束すててある

正岡 子規

秋篠はげんげの畦に仏かな

高浜 虚子

田も畦も道も山辺もげんげかな

原 石鼎

頭悪き日やげんげ田に牛暴れ

西東 三鬼

げんげ田のうつくしき旅つづきけり

久保田万太郎

げんげ畑そこにも三鬼呼べば来る

橋本多佳子

げんげ田に寝て白雲の数知れず

大野 林火

紫雲英田の濃きも淡きも花盛

山口 誓子

げんげ束足下に置いてミサ始まる

加藤かけい

値よければ手放すつもりげんげん田

池田 かよ

ぐっけ

鈴の奏

品川鈴子選

熱爛に些事も大事も明日のこと 大阪 中村みち子

いくばくの年金話炬燵ばた
厚着してずり落ちそうな旅靴

言いわけを二人ながらに年用意 大阪 角谷美恵子
白足袋もすいとひと舞い先斗町
嫁に来る人かもしれず神の留守

「ききつ」とまづ人を嚇かす猿回し

カーテンに淡き長影つるし柿 神奈川県 山崎 辰見
寒稽古天守に声の翻して

聖夜劇終えどの子にもプレセント

風花の空へ放たる熱気球 兵庫 高橋 大三
近況を冬籠とし笑はるゝ
花椿蕉翁の杖なぞ細き

秋没日へたり込む犬引つ張る児

樞紅葉犬もボールをヘッドイング 兵庫 岩田登美子
柿十個児が真直ぐに並べたる
からまりて廃屋ささふ蔦紅葉

夕紅葉終点近くなりにけり

完璧に染りし紅葉ほめちぎり
忌に集ひ沓脱石に秋時雨

茜雲消えて聖樹は青き灯に 岡山 岡 敏恵
庭聖樹灯りノエルがかくれんぼ
雪報に一日早い通知表

靱殻にくすぐられ着く林檎箱 愛媛 城下 明美
将あかぬ老骨鞭打つ十二月

玻璃越しの薄日に鉢の菊傾ぐ

湯上りの顔火照らせて忘年会

一茶忌や一樹占めたる群雀 兵庫 林 美智
ねね橋に紅葉且散る有馬川

御所坊の庭下駄で踏む樞落葉

主なき庭に枝張るピラカンサ 兵庫 岩崎可代子
着ぶくれて月に一度の診察日
マフラーに顎を埋めて解くパズル
洒落気などどつくに失せて着脹れる

秀 鈴 記

熱爛に些事も大事も明日のこと

中村みち子

日頃はあれこれ気を使い、些細な事にまで神経を磨り減らす真面目な人。だがひとたび好きなお酒が入ると、大事なことも、つまらないも皆忘れて、ひたすら熱爛の陶酔に身をゆだね「明日は明日の風が吹く」、とばかり現実から逃避、わずらわしいのは一切御免。何よりのストレス解消法か。

「きぎつ」とまづ人を嚇かす猿回し

角谷美恵子

正月気分でのんびり取り巻く人垣へ、いきなり「きぎつ」と歯を剥いて嚇かす猿。まだ気分も乗っていないのに曳き出され、無理に芸をさせては笑いものにする人間共へ、一発先制を喰らわせて、溜飲をさげる。猿知恵の方が一枚上かもしれない。

風花の空へ放たる熱気球

山崎 辰見

巻頭三句 品川鈴子 評
四句〜十五句 水野範子 //

*選句は全て 品川鈴子

熱気球は大气より軽い加熱空気、その気球の軽さと、風に雪片が舞う低気温の著しい差が、上昇を促し気球は見る見る天へと誘われるでしょう。風と飛雪に後押しされて、小気味良く遠ざかる。気球の鮮やかな彩に戯れるような風花。

花椿蕉翁の杖なぞ細き

高橋 大三

大津市にある義仲寺ぎちゅうじは、木曾義仲公と芭蕉翁の墓所である。芭蕉の「骸は木曾塚に送るべし」との遺言によって、ここに墓を建てた。その寺に芭蕉の杖がある。一見素朴な細い自然の木。何故こんなに細い杖で体重を支えられたのか。細い小さい老の体で、この杖を頼りに各地を行脚した蕉翁を偲ぶ作者。杖と花椿にいろいろの想いが巡る。

からまりて廢屋ささふ蔦紅葉

岩田登美子

廢屋の暗さと、蔦紅葉の彩の取り合わせで美しく転じている。ブドウ科の蔦の茎は、吸盤を有する巻ひげで他物に

からむ。紅葉が美しく廃屋を飾って、しかも支えているメ
リットもある。山里か、町はずれか、とにかく蔦紅葉は、
紋所にもあるように形も彩も美しい。

茜雲消えて聖樹は青き灯に

岡 敏恵

近年、庭木の電飾が目立ち、聖夜をより華やかに盛り上
げる。新興の街の裏通りさえ見物人が増加。それぞれの創
意工夫に眼を瞠る。子供達の喜びもひとしお。茜雲の暗赤
色から明るい青へのコントラスト。電飾の聖樹は普通の家
庭にも浸透して平和の慶びを感じる。

埒あかぬ老骨鞭打つ十二月

城下 明美

見ているだけでは物事がかどらない。さりとて老骨に
鞭打つとは忙しい師走とて何と厳しい事か。とかく年末は
新年の準備に、又思いがけない雑用がわんざとくる。自分
に厳しい作者の気骨が伺える。

御所坊の庭下駄で踏む櫛落葉

林 美智

ウルシ科の櫛は、紅葉がひときわ美しい。山地でよく見
る櫛は、手に触れようとはほしくないが、旅館の御所坊の庭下
駄で踏んだ作者の気分はいかが。日常生活から離れた久し
ぶりの下駄の感触。湯上がりの粋な着こなしで、落葉をか
さこそと楽しんでいる作者。

マフラーに顎を埋めて解くパズル

岩崎可代子

最初は一寸気になり、謎解きも楽しくやりかけたものの、
次第に難しくなり戸惑う。でも作者は、マフラーに顎を埋
めるくらい夢中になっている。寒さも何のその、最後迄や
り終えただろう。中七が生きている。

パソコンに手を焼く夫に蜜柑むく

永塚 尚代

年を重ねると機械操作も遅々として進まない。気持は若
いが少し時間がかかる。覚えても、毎日使わないと忘れる。
そのパソコンに振り回されながらいらいらする夫に、気分
転換にと蜜柑をむく。妻の優しさに上達も速く、自由自在
にパソコンを活用されると思う。